

## 令和6年度青森県伝統工芸士認定者の概要

うじいえ ゆきこ なんぶさきおり  
氏家 幸子氏 《南部裂織》

八戸市

- ・製作体験を行った際、南部裂織の美しさに感銘を受け、平成10年から製作に従事。従事年数は26年。
- ・主に着物を裂いた糸を横糸に使用し、平織やあじろ織など多様な織り方を取り入れた作品を製作している。
- ・所属する「八戸さき織の会」が開催している南部裂織教室で講師を務め、生徒に対して丁寧に指導を行うなど、技術の伝承と後継者育成に貢献している。



かわぎし のぶこ なんぶさきおり  
川岸 延子氏 《南部裂織》

佐井村

- ・地域活性化を目的として、平成2年に村内にあった地機を活用して南部裂織の技術修得を開始。従事年数は32年。
- ・「仏ヶ浦裂き織り」を創設し、津軽海峡文化館「アルサス」で製作した南部裂織を販売している。
- ・村内で南部裂織体験を実施するほか、東京で開催されるイベントなどにおいて南部裂織の実演・体験指導を行うなど、伝統工芸の普及や後継者育成に貢献している。



たかや ともじ したかわらやきつちにんぎょう  
高谷 智二氏 《下川原焼土人形》

弘前市

- ・平成23年から下川原焼土人形の製作をはじめ、平成28年からは7代目として製作に従事。従事年数は14年。
- ・江戸時代から受け継がれてきた約1000種類ある型を使用し、復刻した人形を製作しているほか、新たな原型作りを行っている。
- ・児童館や保育施設での鳩笛などの絵付け体験に協力しており、伝統工芸の普及や文化継承に貢献している。



(参考)

## ○「南部裂織」<sup>なんぶさきおり</sup>の概要

江戸時代に着古した着物や布を再生する機織りの一技法として生み出された織物である。当時は、寒冷な気候のために綿の栽培は難しく、北前船で運ばれた木綿や古手木綿はとても貴重な存在であった。そのため、厳しい生活を強いられた農村地方の女性たちが布を大切にするための知恵から生まれたものである。

細く裂いた布を横糸に、木綿糸を縦糸にして地機で織った裂織は丈夫で暖かく、そのカラフルな色移りと複雑な機上げが特徴である。

主としてこたつ掛けや帯などに用いられてきたが、現在ではテーブルカバーをはじめ現代感覚の手織物にも応用されている。

【主な製造工程】 整経→箆（おさ）通し→男巻き（おまき）→綾越し→  
綜紵（そうこう）通し→元寄せ→機上げ→製織→完成

【主な製品】 卓布・手提げ袋・こたつ掛け

## ○「下川原焼土人形」<sup>したかわらやきつちにんぎょう</sup>の概要

下川原焼土人形は江戸時代の後半に吸収筑前で陶磁器作りを習得してきた初代高谷金蔵が、津軽藩に召し抱えられて下川原に窯を築いたのが始まりである。

明治時代の土人形人気による隆盛、ブリキなど新しい玩具の普及に押された大正時代の衰退という浮き沈みを経て、現在まで受け継がれている。

下川原焼土人形は赤土と砂を調合した粘土を石膏の型枠にはめて形を整え、約 800 度の高温で数時間窯焼きし、最後に色つけをして出来上がる。

鳩笛や干支人形が有名であるが、実際人形の種類は数百も存在する。その素朴な形と穏やかな表情によって淡い郷愁がかきたてられる。

【主な製造工程】 粘土の調合→型ぬき→乾燥→素焼き→地塗り→彩色→完成

【主な製品】 土人形・鳩笛・人形笛